

子どもたち一人一人の学力を高める研究

－図画工作科における育てたい資質や能力を意識した指導と評価の工夫－

I 研究の内容

1 主題設定の理由

本校では、これまで、図画工作科において、育てたい資質や能力を意識した指導を行ってきた。児童が自分なりの発想で試行錯誤を存分に行うことを保障することにより、そこには多種多様な表現で生き生きと活動する児童の姿が見られるようになってきた。そこで、育てたい資質や能力を意識した指導と評価について研究していくことにより、子どもたち一人一人の学力の向上に努めたいと考え、継続して研究を進めることにした。

2 研究仮説

図画工作科において、4つの観点を意識した指導と評価を行うことにより、子どもたちの学力は高まるであろう。

3 研究の内容

4つの観点を意識した指導と評価を工夫する。

【授業づくりの流れ及び指導と評価における工夫のポイント】

	授業づくりの流れ	指導の工夫（手だての実践）	評価の工夫	指導・評価計画
観 点 を 意 識	◇題材の選択	※教科書準拠		●年間指導計画 における題材 の配列 ●評価計画（重 点化・焦点化 された題材の 材の配列） ●題材の評価観 点のパターン 化（分類） ●評価の観点、 評価規準の共 通化
	◇題材の理解	○題材分析		
	◇目標（ねらい）の設 定	○育てたい児童の資質や能力の 明示	○評価規準の作 成	
	◇指導過程・計画の立 案	○題材との出会わせ方 ○場の設定・準備	○評価の重点化 ・焦点化	
	◇指導計画(研究授業) 立案		○評価方法の検 討	
	◇授業実践	○「4つの力」カード、ねらい の提示 ○ピピッとタイムの活用 ○教師の言葉掛け ○支援が必要な子どもへの手だ て ○学習カード・ふりかえりカー ド ○図工ポスト(ピピッとカード)	○評価と指導・ 支援	
	◇実践の振り返り		○評価資料の統 合・調整	
◇題材における最終評 価		○評価のまとめ		
その他	○校内展示の工夫（ピピッとギャラリー等） ○地域・保護者・中他校との連携 ○他の教科での活動			

本年度の研究も、前年度までの研究の成果である上記の○に示す取組を、発達段階や児童の実態に応じて工夫しながら行う。課題となっている「わかりやすい評価」や「評価の妥当性や信頼性」をめざして、特に、上記の●に重点を置いて研究を行う。「4つの力」は常に発揮されるものであるが、題材や指導過程全体を通して、バランスよく「4つの力」が発揮されることに配慮しながら、4つの視点を意識して指導過程や授業を組み立てていく。要するに、題材のねらい、指導過程における毎時のねらいなどを根拠に、年間を見通して指導計画の作成と各題材ごとの評価の重点化を試みる。今使う（ねらいに則した）力が明確になれば、児童が自信を持ってそれらの力を存分に発揮して活動していくことができるであろうと考え、研究を進めていく。それに加えて、地域や保護者との連携や中学校との交流もできる範囲で進めてきた。

## II 成果と課題

- 「4つの力」を意識して題材を理解することにより、材料や場、道具、授業の流れなどを子どもたちの状況に合わせて工夫して設定することがさらに定着した。そのことにより、子どもたちが意欲を持ち楽しみながら材料や用具に親しみ豊かな経験をしていく中で、その資質や能力を発揮することができた。「育てたい力」を明確にした上での重点化、材料や道具、場の設定の有効性や絞り込みについての研究を進めた。その中で、無理をして一つの観点到重点化する必要はないことや鑑賞を重点化して見取る時間を増やすことのご指導もいただいた。
- 年間指導計画づくりについては、新指導要領を踏まえ共通事項を意識することで、作成することができ、奇数学年は、それに基づいて一年間の指導を行い、修正を行うなど一定の成果が出た。今後、それを活用して検証していくことが大切になる。
- 題材との出会わせ方や導入段階での活動がその後の表現活動を大きく左右する。それが重点化（ねらいの明確化）にも影響する。題材や子どもたちの状況に合わせて工夫したことにより、子どもたちが意欲を持って、発想豊かに活動を進めることができた。
- 「4つの力」を意識した言葉掛け、特によさを認める共感的な言葉掛けにより、子どもたちは安心して自信をもって表現活動に取り組むことができた。
- 支援を必要とする子どもへの手だては、言葉掛けがも有効であった。「問いかける（対話）」ことで、子ども自らが解決に向かうことができた例も見られた。
- 3年生の研究授業では「ピピッとタイム」が効果的であった。「ピピッとタイム」も子どもたちに定着し、他の作品や活動から学んだことを自分の表現に生かす姿が多く見られるようになってきた。
- 校内展示の工夫として「ピピッとギャラリー」を職員室前の廊下に設置した。いつも同じ物ではなく、定期的に内容を変え、新たなものを積極的に取り入れ。どの内容についても子どもたちが楽しんで取り組む姿が見られた。子どもたちの鑑賞の場として効果が期待できるが、一番効果的な物は何かや、準備・運営などの面で教員の負担をどう軽減していくかが課題である。
- 「ピピッとカード」については、今年度も取り組んだ。また、授業参観などを利用し、保護者にも書いてもらった。学年を超えて作品を見る活動等も見られた。松里中学校や井尻小学校へのカードも積極的に取り組み、見ることへの意識の高まりも見られた。
- 学習カードや作品、活動の様子の写真等を家庭に持ち帰らせ、子どもがつくっている過程や作品への思いを感じてもらえるように、今年度も全校で試みた。参観の折には、多くの保護者がピピッとカードを何も言わずに書いてもらうようになり、今までの活動の定着化が見られた。

（研究主任 川野 和昭）